

ギュンター・グラスのコラボ文学活動試論

依岡隆児

Der Versuch über Günter Grass' Collabo-literarische
Aktivität

YORIOKA Ryuji

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 2433-345X

第 27 卷 別刷 2019 年 12 月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University

Volume XXVII, December 2019

ギュンター・グラスのコラボ文学活動試論

依岡隆児

Der Versuch über Günter Grass' Collabo-literarische Aktivität

YORIOKA Ryuji

Abstract

Günter Grass' Tätigkeiten bestehen nicht nur aus literarischer Produktion, sondern auch aus politischer Einmischung und künstlerischer Aktivität u.s.w.. Aber diese nicht-literarischen Tätigkeiten stören seine Tätigkeit der Literatur nicht, sondern sie spielen eine ergänzende Rolle für sie.

Hier wird über die Möglichkeiten und Originalität der Literatur in der Gegenwart nachgedacht, indem ich Günter Grass' Collabo-literarische Aktivität, d.h. sein Zusammenarbeiten mit den anderen Disziplinen in dem Günter Grass-Haus ins Auge fasse. Zugleich versuche ich klarzumachen, wie vielseitig sich seine literarische Aktivität mit anderen Disziplinen entwickelt, und wie er die Möglichkeit der Literatur erweitert, die die Literatur sozial-offen machen könnte.

1. はじめに

文学の危機が唱えられたのは今に始まったことではないが、現代ではさらにデジタル化やエンターテインメント化、批判精神の消失、メディアミックスという現象が起り、文学はそうした状況に埋没し自らの独自性を見失っているようでもある。そんななか、「危機にある」こと自体に文学の本質を見るという主張も出ている（「文学の危機」『思想』2019年11月号）が、一方でそこで自明とされている「文学」が何なのかがあいまいなまま、いたずらに議論を重ねているようにも見うけられる。

そこでここでは、作品論・作家論でも、文学の政治的側面の研究でもなく、文学を複数ディシプリンとの協働の中に置いて、他分野との関係の中で捉えなおすという手法を試みて、文学者の政治活動や造形芸術創作、映画制作、講演活動を付け足しとみるのではなく、こうした他分野・他ジャンルとの関係性の中で初めて見えてくる文学のあり様を示してみたい。この点でギュンター・グラスはうってつけの例である。というのも、彼は多面的活動を展開し、マルチディシプリナ手法で制作してきたからである。グラスの異分野協働的活動は多岐にわたり従来の文学のイメージを大きく変えたが、それは他の活動と安易に協調して目的遂行にまい進するというものではなく、異なるディシプリンと妥協することなく向き合い、対照的に自らの独自性を確認するという性格を有していたのである。

グラスはアウシュビッツの後に書くことを使命と受けとめ、戦後ドイツ文学の代表として市民活動を展開し、「啓蒙」の限界を認識しつつ文学の新しい可能性を追求した作家である。そのあまり政治活動が自らの文学創作を阻害することもあったが、彼が同時代の市民として社会から距離を置くことはなかった。むしろその活動は政治と文学との関係にかぎらず、さらに他のディシプリンとの緊張関係の中でも展開されてきたのである。

筆者は、これまでギュンター・グラス研究を一貫して行ってきたが、並行してグラスと日本の作家との比較研究や、彼自身の文学以外の活動にも言及してきた。そんななか、このような文学以外の活動が彼の文学活動にとってノイズになっていたのではなく、むしろ相乗効果をもたらすものとして不可欠なものだったのではないかと考えるようになった。グラスを異分野協働という活動の中で捉えなおすことが、現代の文学をめぐる状況を批判的に考察するきっかけとなり、新しい文学の可能性を切り拓くのではないか。このような問題意識のもと、本稿では以下、グラスの市民活動やギュンター・グラス・ハウスの活動を中心に、異分野協

働的活動を通して文学の現代的可能性を明らかにしていく。

2. 「対話する複数」

文学の定義に「言語表現による芸術作品」¹というものがある。文学が芸術であるかどうかはさておき、文学が芸術として受けとめられてきたことは否定できない。しかし、一方で純粋芸術に比べれば文学は言語という、より日常的な媒体を使うがゆえに、ノイズに親和的であり、純粋性が保ちにくい面を持っている。そのあまり過度に政治的になる場合もあれば、商業主義に流れることもあった。それゆえ、こうした文学が社会においていかに存在しうるのかという問題は繰り返し提起されてきたのである。

専門性を究めようとすれば社会から離れてしまい、社会に接近すれば専門性を薄めてしまう。一方、他の芸術とは異なり、文学が社会から離れてしまうことは難しい。そこで両者を両立させる必要があり、文学の社会に適応した形を模索しなくてはならないのだが、現在までのところそれが十分に解明されているとはいえない。

ここでグラスを例に取るのは、彼が文学者として書齋にこもることと市民として町なかに出ることを、1960年代からずっと両立させようと模索してきた人だからだ。アンガージュマンの作家として知られていた時代には、それこそ書齋を後にして選挙応援ツアーに出て、創作の時間をなくした時期もある。そのため創造力の枯渇を批判されることもあったが、それでも市民活動はやめず、創作を続けた。むしろ、その文学的質の低下と集中できない状態については本人も自覚していた。にもかかわらず、彼はなぜそういう活動を継続できたのか。グラスのケースを見ることは、文学創作と政治市民活動などの非文学的活動との両立の困難さ、ならびにその可能性を知ることになるのではないかな。

そこで本稿では、市民として民主主義を追求しながら創作を続けるなかで、グラスがディシプリンの違うものを対抗させるやり方を選んだと考える。すなわち、異なるものとの共存を創作の面でも生かすために、文学と造形芸術、文学と政治、文学と映像メディアなど、異質なもの同士が拮抗しながら互いに刺激し合う関係を構築していったのではないかな。ここでは、マルチディシプリンな展開こそ、彼

¹ たえば『明鏡国語辞典 第二版』（大修館書店）では、「文学」の意味の①を「言語で表現される芸術作品。詩歌・戯曲・小説・随筆・評論など。文芸」としている。

にとつての文学を活かす道だったと考える。

このことを明らかにするために、グラスの政治的主張がヒントになる。グラスはドイツの東西問題について 1960 年代から、連邦制による国家連合という形での東西接近を唱えていた。1967 年の講演「対話する複数」では、二つのドイツは互いに競い合い刺激しあう州が一致協力し協働する体制となり、それがヨーロッパ統合のモデルにもなると主張した。²イタリアやフランスでは当たり前の「対立する党同士のしばしば不協和なコンサート」³をみならい、ドイツでもこうした政党制民主主義のあり方を追求すべきだとして、その延長線上に東西ドイツの接近も考えていたのである。

この講演では、このことがドイツの分離主義の伝統からも説明されている。もともと小邦乱立した諸国の集合体だったドイツは、それぞれの国（ラント）が対立しながらも協調していくことを前提としていた。それがドイツ帝国という形で上から統一されると、大きな危機をもたらしたと、グラスは見ている、ドイツは分離主義的な国家形態においてもっとも有効に機能する国なのだとする。諸国の特性を活かし、それぞれの地域性や風土に合った発展を可能にする形態が、現代においては国家連合「フェデレーション」なのであり、これが東ドイツとの統一、さらにはヨーロッパ統合においてキー概念になると考えたのである。なお、グラスはこの国家連合構想を 1990 年のドイツ再統一のときにもふたたび持ち出し、東西ドイツの対等な国家連合を対案とすることで、コール政権下での西ドイツへの東ドイツの併合というやり方に反対した。

また文化の面では、講演「学ぶ教師」⁴で移民の子どもの総合学校における教育について、イスラム文化の影響がヨーロッパ文明にとって大きな意味をもっていたことを数学や音楽の分野において指摘し、異文化を背負った子どもの存在の文化的重要性に言及している。教師がまずそうした子供たちが担う文化を学ぶことが大切だと主張し、異文化の尊重や異文化交流は、文化を異にする人々を単に保護するという人道的理由からだけでなく、自文化の活性化においても必要だということを説いていたのである。

² Grass, Günter: Die kommunizierende Mehrzahl. In: Günter Grass Werkausgabe in zehn Bänden. Bd.9. Darmstadt und Neuwied 1987, S. 234-235.

³ Ebd. S. 234.

⁴ Grass, Günter: Der lernende Lehrer. In: Für- und Widerworte. Göttingen (Steidl Verlag) 1999. 1999 年 5 月 13 日にベルリンのフリッツ・カルゼン学校で行われた総合学校会議での講演。

さらに講演「居場所についての講演」⁵では、社会主義の崩壊が資本主義の一人勝ちを招いているという状況に対して、それに対抗する存在を指定することの必要性を唱えている。資本主義の一人勝ち状態を「ゴドーを待ちながら」のモノローグ劇に例えているが、むしろここでは社会主義の復活を唱えているのではなく、ディアローグとしての政治のあり方の必要性を主張していたのだ。すなわち、異なるディシプリンの排除ではなく、それとの対抗的対話関係が政治体制自体を健全にすると、グラスは考えてきたのである。

このように、グラスの市民としての政治的主張には複数性による対話構造の中で社会の活性化を目指すという観点がみとれるのだが、また一方で、小説の世界においてもこのような対話対抗的な関係性が文学の特性として取り上げられていた。たとえば、小説『ひらめ』では、グリムのメルヒェン「漁師とその妻」における類話について、話の提供者だった老婆に、妻が悪者とされる話と夫が悪者という話の両方があるがどちらが本物かという問いに対して、「あっちもこっちも真実さ」と答えさせている。⁶グラスはこのように複数の真実の存在を強調し、その帰結として物語には語り直しが要請されるという点に注目している。彼自身は一つの真実に対して、それとは異なる真実の物語を紡ぎ出すことで物語り続けるという文学伝統に組み込んでいるのであるが、真実は一つという常識に対して、ここではこうした「複数の真実」に開かれた文学の特性を対置させようとしていたともいえる。

ちなみに、作家でジャーナリストのエッケハルト・ルドルフとの対話「真実のアンビバレンスさを示す」（1975年）では、グラスは「芸術家と作家は矛盾しない、補い合う」⁷と述べ、文学的手法で創作の地平を広げる⁸ことを目指している。書く原理と描く原理は互いに修正し補いあい、衝突しながら、チェック機能を働かせるのであり、互いに厳しく吟味し合った後に、ものに対するおもしろさがやってくるとする。⁹グラスは「こうしたディシプリンを互いに働かせて、それらを

⁵ Grass, Günter: *Rerde über den Standort*. In: ebd., S. 60. 1997年2月23日に、ドレスデン、シャウシュピールハウスにて、ベルテルスマン社主催のシリーズ「テーマ：ドイツについて」の一環で行われた講演。

⁶ Grass, Günter: *Günter Grass Werkausgabe in zehn Bänden. Bd.5 (Der Butt)*. Darmstadt und Neuwied 1987, S. 412.

⁷ Grass, Günter: *Die Ambivalenz der Wahrheit zeigen*. In: *Günter Grass Werkausgabe in zehn Bänden. Bd.10*. Darmstadt und Neuwied 1987, S. 181.

⁸ Ebd., S. 182.

⁹ Ebd., S. 183.

取り扱うことが私には面白いのです」¹⁰と述べ、さらに、さまざまな現実に基づきながら、芸術は多様な複数性を明らかにする可能性を持つ¹¹とする。

このようにグラスは二つの真実、二つのディシプリン（書くこと／描くこと）が互いに衝突しながらも補強し合って、相互チェックする役割を果たしているとして述べているが、それというのも、これが文学の可能性を広げることができるからである。彼は異質な原理と向き合わせることで文学自体を揺さぶり、新しい可能性に開いていこうと、意図的に複数のディシプリンの間に身を置いてきたと考えられる。

この対話ではまた、作家は見る人、告知する人であるばかりか市民でなくてはならない¹²と述べるように、グラスは、作家は同時に市民でなければならないとも考えている。社会の外でただ見て告知するだけでは不十分で、作家は市民としても存在しなくてはならないという。この点でも彼が市民であることや社会と関わることが文学活動と相いれないとは考えていないことは明らかだ。

3. 文学的コラボ—ギュンター・グラス・ハウスの活動から—

前章でグラスの活動には「対話する複数」という原理が働き、彼の文学と造形芸術、あるいは文学と市民性という二つのディシプリンの関係にも、それが発揮されていたことを見てきた。こうした原理はさらに、彼の他の活動にも当てはめられ、コラボ的なマルチディシプリンな文学活動としても展開されていたのである。ここでは、グラスのこうしたマルチディシプリンな活動について、ギュンター・グラス・ハウスにおける活動を中心にみていく。

書籍の売り上げは落ち、社会における文学の位置づけが怪しくなり、かつてのアンガージュマンの時代のように、良くも悪しくも社会に関わり影響を与えてきたのとは異なり、文学は細分化された自閉的な専門領域となるかエンターテインメント化し、商業主義に陥ろうじて活路を見つけ出すしなくなっている。ネットの普及が言論活動の場を提供しつつあるが、そのプラットフォームも巨大 IT 企業の寡占的支配のもとにある。

では、こうした現状のなか、文学はいかに社会的影響力を持ち、社会に新しい見方を指し示すことができるのだろうか。ドイツにおいてこうした状況に対して常に新しい可能性を示してきたのがグラスである。もっぱら政治活動の面でスキ

¹⁰ Ebd., S. 183.

¹¹ Ebd., S. 185.

¹² Ebd., S. 188.

ヤンダラスな話題を振りまいてきた作家と見られがちだが、実際は政治だけでなく異分野とのさまざまなコラボ活動を展開していた。出版・書店業者や映画制作者、音楽家、メディアとのコラボ、ならびに自身の文学と造形芸術の相補的活動は、創造の新しい可能性を指し示してもいたのである。そこで本稿では、グラスの活動を事例にして、文学のアクチュアリティはこうした異分野との協働という「マルチディシプリン」な展開にあると考えていく。

ただ、「コラボ」には「コラボラシオン」というナチスドイツ支配下におけるフランスの利敵協働という意味もあり、それは自らのディシプリンを否定する面を含んでおり、目的のために自らの存在価値を犠牲にすることにもつながる。それに対してグラスは、政治でも「不協和なコンサート」¹³を目指したように、創造的な対抗関係の場を作ることで、商業主義的で安易なコラボとは異なる対抗的で対話的な創造性と内省を可能にしていたのである。

グラスの場合、文学をもとにした活動の多くは他ジャンルの活動とコラボした形で展開されており、集団やコミュニティを形成して新しい創作につながっていく場合もある。政治活動や芸術アカデミーでの活動、他国の作家や芸術家との対話、映画制作への関わりや出版社との協働作業、ギュンター・グラス・ハウスでの造形芸術活動と地域貢献活動、マイノリティ支援活動など、文学を基軸にしつつも異なる分野と協働するというスタイルが目につく。それは単にイベント的に人目を引くパフォーマンスとしてなされていたのでもなければ、表面的な人間関係に縛られた活動でもなかった。実利的・現実的な対応として異分野との協働が求められることもあるが、グラスはむしろそこに異分野からの刺激による新しい創造を期待している。しかしそればかりか、これは切磋琢磨する緊張感を持った、互いのディシプリンを相互尊重しながら、自らのスタイルを再確認するような関係でもある。一つのディシプリンで得られないような新しい創造性をもたらすこともある一方で、異なるディシプリンとの対照・対話を通して自らのディシプリンへの内省が得られるのである。コラボとはこのように、グラスにとっては社会への現実的対応としての異分野協働であるとともに内省をもたらす可能性を有していたと考えられる。

ここで「文学活動」とは単に作品を書くということにとどまらず、朗読会開催や出版活動、映画制作への関与、文学組織や機関の運営はもとより、文学とは異分野のものとのコラボ活動をも含むものとする。そうした異分野との協働に着目することで、かえって文学の独自性があぶり出されることになるが、一方で従来の文

¹³ Grass, Die kommunizierende Mehrzahl, a.a.O., S. 234.

学のディシプリン内の研究は文学の理念的定義に依拠するあまり、こうした文学のアクチュアルな姿を見損なってきたのではないか。それに対して、本稿は文学のコラボ活動に注目しながら、現実の活動の中で文学の独自性を浮かび上がらせようとするものである。

グラスは「文学振興」にも着手するが、それは市民活動の一環であるとともに、コラボ活動としてのマルチディシプリンな活動という側面も持っていた。グラスの事例は、そうした「市民」という観点から文学がより普遍的で自由な活動として展開され、社会的意義を持ちうるということを示している。そこでここでは、その具体例としてギュンター・グラス・ハウスをとりあげ、マルチディシプリンな文学活動について考察を加えてみる。

ギュンター・グラス・ハウスは作家であり造形芸術家のグラスを顕彰するとともに、地域の文化活動を実践するユニークな施設である。同館は2002年10月にリュウベック市に開館し、ハンザ都市リュウベック文化財団の傘下で、ベルリン芸術アカデミーとプレーメン・ギュンター・グラス文化財団の協賛のもと、運営されている。同市にはノーベル賞作家トーマス・マンを記念するブッデンブローク・ハウスがあり、さらに後年、同じくノーベル賞受賞者だったヴィリー・ブランツのための記念館が設立された。このヴィリー・ブランツ・ハウスがギュンター・グラス・ハウスと隣接する場所にあるなど、三館は密接な関係にある。グラス・ハウスは中庭にはグラス自作の「つかまれたひらめ」などの彫刻を設置し、グラスの造形芸術面での作品展示を積極的に行い、さらにまた他の作家・芸術家の作品も展示している。文学面では1995年以降のグラスの原稿などの成果を所蔵している。2004年には「ギュンター・グラス・ハウス友の会」を創設し、そこで得られた会費収入を、展示会やコレクション購入のために使っている。2012年にリニューアルされ、ホームページ¹⁴やフェイスブック¹⁵での広報も行っている。

同館は単に作家を顕彰するだけでなく、市民にアクチュアルな活動の場を提供し、朗読会や生徒のための研修会を開催し、市民と協働するイベントを工夫してもいる。展示企画展で終わりがちな日本のこの種の文学施設と比べ、文学が社会のなかで生きた働きをしていることがみてとれよう。以下、その活動の例として、ギュンター・グラス・ハウスで2002年開館から2014年までに開催された展示会をギュンター・グラス・ハウス図録『新グラス・ハウス』¹⁶よりリストアップする。

¹⁴ ギュンター・グラス・ハウス HP <https://grass-haus.de/>

¹⁵ ギュンター・グラス・ハウス Facebook <https://ja-jp.facebook.com/grasshaus/>

¹⁶ Thomsa, Jörg-Philipp (Hg): Das neue Grass-Haus. Lübeck 2013.

2002/2003

ペアリング ギュンター・グラス・ハウスのコレクションから

2003/2004

『私の一世紀』 100のアクリル—100の物語

2004/2005

理想郷（アルカディア）のこちら側とあちら側 風景画家としてのゲーテとグラス

線の魔法使い—ギュンター・グラスの文字絵

言葉絵と入れ替え

ホルスト・ハーク 編年史記録・地球（作業中） 文字や絵で

2005/2006

線の魔法使い—ギュンター・グラスの文字絵 前年に引き続き

フーベルト・ギーベ ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』の版画と文学に付けたほかの絵

目覚めのキスをされて メルヒェン風の絵

不死身な人々 ギュンター・グラスの『果てしない荒野』の絵の世界

2006/2007

海の楽しさ—ギュンター・グラスの海の絵と彫刻

ヘルマン・ヘッセ—色は生

画家としてのヴィルヘルム・ブッシュ

2007/2008

愛する神 オットー・パンコーク ギュンター・グラスの「先生」

『道化役』 ギュンター・グラスの詩とリトグラフ

初期グラス—50年代

ギュンター・グラスの絵の世界（継続展示）

2008/2009

ブランド支持の市民 政治的グラス

ロベルト・ゲルンハルト 最後の絵

2009/2010

「続く…」 ギュンター・グラスのライフワークを見る
劇作家の兵器庫 フリードリヒ・デュレンマットの絵画芸術
一冊の本が歴史を書く—『ブリキの太鼓』50周年

2010/2011

リュウベックにおけるヤノツシュ
ダンツィヒからリュウベックへ ギュンター・グラスとポーランド

2011/2012

神話と未来の夢 エルンスト・バルラッハのテキストと絵
森の上空の雲 NABUの展示会 ギュンター・グラス・ハウスとの共催
©アルノー・シュミット 写真家としての作家
青少年を害する文書 ゲーテ、ヘッセ、グラスとその仲間から

2012/2013

田園の狩人 画家としてのゴットフリート・ケラー
人間と場 アンゲリーカ・フィッシャーの写真
新グラス・ハウス (継続展示)

2013/2014

ジョン・レノンのアート
オリンポスの動揺 マルクス・リュウペルツの詩、スケッチ、彫刻
『犬の年』50年 芸術家の小説、おとぎばなし、ふるさと読本

以上のように開催された展示会を見てみると、文学と造形芸術という二つのディシプリンにまつわる企画が多いことがわかる。これはこの館がもともとグラスの造形芸術面での活動を顕彰する目的で作られたからであると考えられる。「理想郷(アルカディア)のこちら側とあちら側 風景画家としてのゲーテとグラス」「線の魔法使い—ギュンター・グラスの文字絵」「言葉絵と入れ替え」「フーベルト・ギーベ ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』の版画と文学に付けたほかの絵」「ヘルマン・ヘッセ—色は生」「『道化役』 ギュンター・グラスの詩

とリトグラフ」「劇作家の兵器庫 フリードリヒ・デュレンマットの絵画芸術」などが、それにあたる。グラスの自作に付けた版画・アクリル画の展示やグラスのみならず他のジャンルの造形芸術活動をする作家の展示会も企画されていたことがわかる。また文学と造形芸術以外のコラボ活動を扱った、「ブランド支持の市民 政治的グラス」や「©アルノー・シュミット 写真家としての作家」もある。¹⁷むろん、これらの企画はグラス自身が立てたものではないが、同館はグラスの創作コンセプトを汲みとって、このような活動を展開してきたと考えられる。

展示会のほか、同館のイベントとして、文学と写真、音楽、政治活動に関連するものもある。たとえば2009年12月19日には映画『ブリキの太鼓』の監督シュレンドルフとの対談が、リューベックの映画館での「映画としての『ブリキの太鼓』の30年」という企画の中で行われ、またグラス・ハウスでは頻繁に政治家たち（シュレーダー、ヨシユカ・フィッシャー、ゲンシヤー）の訪問を受けている。

2012年の「屋外のグラス」という企画は、俳優たちがバスに乗ってリューベックを回り、思いがけない場所でグラスの作品を朗読するというものだった。また同館ではグラス自作朗読会として、「『玉ねぎの皮をむきながら』2006年9月オーディオブックのために」と「『ひらめ』2008年1月～2月、オーディオブックのために」とが催されたが、それぞれCDオーディオブック制作を兼ねた朗読会だった。

子どもや青少年のためのイベントとしては、2010年にヤノッシュの展示会、2008年、2009年に「子どもフェスタ」、2013年にバンドコンテストが開催され、2013年の「博物館の夜」では参加した青少年クラブが「ギンター・グラス・ハウス青少年友の会」を設立している。

この図録『新グラス・ハウス』には館長のヨルク＝フィリップ・トムザによる「グラス・ハウスの何が新しいのか？」という記事が掲載されている。それによると、「不確かなものに確かに出会う」というリニューアルにあたっての企画展でグラスの文学的仕事と造形芸術の仕事が互いに影響し合っているという問題を専ら扱ったことから、作家であり、版画家、彫刻家、政治的活動をする市民と

¹⁷ 二つないし複数の専門的才能を持っていてグラス・ハウスで展示された人としては、ゲーテ、ヘッセ、ヴィルヘルム・ブッシュ、デュレンマット、ゴットフリート・ケラー、アルノー・シュミット、エルンスト・バルラッハ、ヤノッシュ、ロベルト・ゲルハルト、ジョン・レノン、マルクス・リューペルト、コーネリア・フンケがいる。

いうグラスの仕事全体に向き合う余地がより拡大されたと、改築したグラス・ハウスの特徴を説明している。¹⁸同館はグラスの造形芸術活動のために作られたように見えるが、それはむしろグラスの全体像をとらえる試みとなっている。グラスの造形芸術での活動を顕彰し、それと文学との関係を明らかにしながら、さらにそこからグラスの創作全体をカバーしようとしていたのである。

筆者は同館を2002年開館時の第1回国際ギュンター・グラス・コロキウム(リュベック市庁舎で)とグラスの自作朗読会に参加して以来、4回訪問し、秘書や学芸員とコンタクトをとってきたので、この館の成り立ちについて実際に見聞することも多々あった。1階ではグラスの生涯について、作品の版画やスケッチを交え、オーディオや映像も使って紹介されている。2階は特別展スペースになっていて、そこでは上記のような企画展示会が開催されている。また別棟にはグラスの工房があり、その中には制作品が所蔵され、学芸員によって管理されていた。工房の2階にはちょっとしたパーティもできる応接間があり、ゲストとの交流の場ともなっていた。

このようにギュンター・グラス・ハウスの活動は、文学とその他の分野の活動をつなぎ、そこに社会に開かれた文化的交流の場を作り出す試みとなっている。造形芸術に脚光をあてながらも、館のコンセプト「文学と造形芸術のフォーラム」が示すように、文学を異分野協働という関係性の中で捉えなおす「広場」ともなっているのである。同時にまた、このように異なる分野との間に対話と交流を積極的に展開していくのは、他者との関係の中に身を置くことで文学に社会性を回復させるためだったとも考えられる。

4. おわりに

以上、本稿では現代における文学の危機に対して、ギュンター・グラスの異分野との協働というコラボ文学活動に着目し、ギュンター・グラス・ハウスを中心にそうした活動が対照的、かつ内省的に文学の可能性と独自性を示してきたことについて考察した。すなわち、グラスの文学活動やギュンター・グラス・ハウス運営において、文学がいかにマルチディシプリンに展開されてきたかを検証した結果、現代において文学は審美的な言語表現であると同時に、異なるディシプリンとの協働の中でその独自性を発揮することと、そうしたコラボ活動が文学の可能性を広げ、それを社会に開かれたものにしてきたことを明らかにした。

¹⁸ Thomsa, Jörg-Philipp: Das neue Grass-Haus. In: Das neue Grass-Haus, a.a.O., S. 33.

ギンター・グラス・ハウスにかぎらず、ドイツでは Erzählkultur や Vorlesekultur といった「文化」活動が文学館や文化施設、書店で展開され、作家の朗読会や文学にまつわるディスカッションに市民が参加するシステムがさまざまに工夫されている。グラス自身、ギンター・グラス・ハウス以外にも、例えば、ベルリンの独立系書店「作家たちの本屋 Autorenbuchhandlung」¹⁹で自作朗読会を開催している。他方、日本の文学館は企画展示会を中心に、有名作家の顕彰に終始しがちで、文学を市民の活動から浮き上がらせてしまうあまり、市民たちが文学を通して交流するというアクチュアルな場となっていないのではないかと。それに対して、文学活動のマルチディシプリナリな異分野協働的展開の可能性という点で、ドイツの文化施設、特にギンター・グラス・ハウスの試みは参考になるだろう。まさに同館は現代社会における文学活動の実験室のような役割をはたしていたのである。

とはいえ、グラスの異分野協働的活動については、上記の活動にとどまらず、映画・オーディオ制作、反核平和運動の市民活動、出版における作家の協働など、多くのコラボ活動があり、本稿ではこうした活動までは検討できなかったし、文学の現代的特性と可能性についてもまだ十分には明らかにできていない。それらについてはまた別の機会に改めて論じてみたい。

¹⁹ Autorenbuchhandlung

<https://www.berlin.de/ba-charlottenburg-wilmersdorf/ueber-den-bezirk/wirtschaft/buchhandlungen/artikel.189914.php> (2019.11.12 閲覧)